

届け 世界の果てまでも

令和3年9月7日

No. 28

文責 校長 飯久保一男

子どもとの接し方③ …成長に合わせて

寿司のチェーン店で販売している寿司は「ワサビ抜き」が多くなっているようです。別添えにワサビがあり、ワサビが必要なら、そのワサビを自分でつけて食べるようになっています。コスト削減やアレルギーの関係があるのでしょうか。私は、子どもが食べることを想定しているのだらうと勝手に解釈しています。



…ワサビには、殺菌作用があり、魚の生臭さを消す効果もあり、生の魚を食べるときに使われてきました。現在は、魚の鮮度もよく、生臭さもないことからワサビ抜きで食べるという人が増えているそうです。

家庭でつくるカレーはどうでしょう。小さい子どもがいる家庭では、多くの場合「甘口」のカレーにするでしょうか。大人用に別の鍋で「辛口」をつくる場合もあるかもしれません。

小学校は1年生から6年生まで、幼児期から少年期、さらに思春期までの子どもが一緒に過ごす場所です。寿司で例えると、ワサビ抜きでないと食べられない子どもと、ワサビ入りを好む子ども、カレーで例えると、甘口を好む子どもと、中辛や辛口を好む子どもが一緒にいるのです。

校長は全校の子どもに話すことが多くあります。その場合、1年生にもわかるように話をします。しかし、それでは、高学年の子どもには物足りない話や言葉づかいになってしまいます。これは、小学校の校長に課せられた「難題」です。寿司はワサビなしにして、カレーは甘口にして…、それでちょうどいい子と、それでは物足りない子がいるという関係に似ています。

そして、家庭では…、たびたび書かせていただいておりますが、親は、子どもの成長に合わせて接し方を変えていく必要があります。カレーでいえば、甘口から、中辛、そして辛口へと接し方を変えていかなければなりません。寿司でいえば、いつからワサビ入りのものに挑戦させてみるのかのタイミングが難しいところです。

今は掲載されていませんが、一つ前までの6年生の国語の教科書に「カレーライス」（作：重松 清）という物語文が掲載されていました。



主人公「ひろし（6年生）」の家庭は、お母さんの仕事が忙しい週には「お父さんウィーク」として、お父さんが食事をつくります。それが決まって「甘口」カレーなのです。ひろしはお父さんのつくる「甘口」カレーが嫌でたまらないのですが、小さいころは喜んで食べていたので、お父さんはひろしの好物だと思っています。

お父さんとゲームの時間のことでケンカをし、父と子の関係がギクシャクしているとき「お父さんウィーク」になります。そのときにお父さんが風邪をひいてしまうのです。そこでお父さんに代わり、ひろしがカレーをつくるのですが、それが「中辛」なのです。

お父さんは自分が思っているより、ひろしが成長していたことを感じます。いつまでも甘口ではなく、もっと早い段階で中辛にしてよかったのです。お父さんは中辛をつくり、中辛を食べるひろしの成長を喜び、ひろしのつくった中辛のカレーをパクついて「風邪も治っちゃったよ」と言うのでした。

…この話はインターネットやYouTubeで見ることができます。

前号、前々号に続き、早稲田大学名誉教授の加藤諦三さんのコラムです。カレーのような辛口です。

※わかりやすくするために、一部、加筆・修正してあります。

今、日本に、マニュアル母親が増えてきた

子どもがテレビを見て「カップ麺を食べたい」と言ってきた。すると「カップ麺は体によくありません」と言ってカップ麺を食べさせない母親がいる。育児の本に書いてあるのか、どこで学んだか知らないが、「カップ麺は体によくない」という知識をもっているために、それを無条件に子どもに適用する「マニュアル母親」である。母親は子どものためと思っているが、子どもは不満である。

今、日本に、このマニュアル母親が増えてきた。マニュアル母親は自分が不安なのだ。だからいろいろなことに対して、本などの知識から、とにかくマニュアルに従って「ノー」を言う。そのときの状況とか、そのときの子どもの状態とかを考えないで、とにかく「ノー」を言う。

またある母親は、子どもに言われたとおりにカップ麺を買ってきて出す。「迎合母親」である。子どもの健康には無関心である。子どもの健康よりも、自分が子どもに嫌われることが心配なのだ。これも、もちろん不安な母親である。

しかし、子どもを素直に育てる母親は「子どもがカップ麺を食べたい」と言ったときには、グレープフルーツなり、キウイなり、イチゴなりを添えて出してあげる。それがその家の文化になっていく。子どもはこうして、自分の家の文化の中で育っていく。

あるいは子どもを素直に育てる母親は、ニコニコしている子どもの顔を見て、半分だけ出してあげる。マニュアル母親と違い、子どもの表情を見ている。子どもの楽しそうな笑顔を見て、判断する。こうした母親は自分自身が満たされているのであろう。

そして、そこで、子どもから「ありがとう」という言葉が出てくる。子どもは「お母さんは自分のことを考えていてくれる」と母親を信じるようになる。こうして母親と子どもの信頼関係ができてくる。

それに対してマニュアル母親は子どもの心を理解していない。だから、がんばってはいるのだけれども、子どもとの信頼関係ができてこない。本などで育児の勉強をするのだけれども子どもとうまくいかない。なぜなら、マニュアル母親には基本がないからである。「本に書いてある…」「栄養士が…」と言うことで、自分の子どもを見ていない。基本は自分の子どもに対する愛情である。愛情があれば自然に分かることがマニュアル母親には分からない。その基本が抜けているから、例えば「これが子どもの〇〇を育てる！」という本を熱心に読み、必死に勉強をしても、子どもの〇〇が育たない。



アメリカインディアンの教え「子育て四訓」

- 一 乳児はしっかり肌を離すな。
- 一 幼児は肌を離せ 手を離すな。
- 一 少年は手を離せ 目を離すな。
- 一 青年は目を離せ 心を離すな

大自然の下、厳しい掟とともに生き抜いてきたインディアンの知恵です。